最終決断をするのは機長なんですよ。会社もおなじだと思います

株式会社タカトモインダストリ／代表取締役

高橋智基氏

たかはし　ともき

大空への想い

小型単発機の総称のように呼ばれる セスナ とは、本来アメリカの飛行機会社セスナ社製の軽飛行機のことだ。そうして、いまトモキの眼のまえにあるのは正真正銘のセスナ機だ。172型スカイホーク。

トモキはもの慣れた動作でプロペラから、それがセスナ製の特徴である胴体の上部にある主翼のほうにまわり、尾翼に移り、やがて脚部のタイヤに触れた。スタッフが入念な点検を行っていたとしても、パイロット自らのフライトチェックは怠れない。

トモキが機長の証しである左側の操縦席に乗り込むと、顔全体がヒゲに埋もれたようなベテランの整備士さんが、「コンタクト!」と晴れ渡った空に高く響くように叫んだ。トモキはセスナのプロペラの回転を開始する。

整備士さんがにこりと微笑み、「よいフライトを」というように軽く右手を上げた。トモキはセスナを滑走路に向けてゆっくりと走らせる。

ピーク時らしく滑走路では巨大な旅客機が引っ切りなしに離着陸していた。管制塔と英語まじりで交信していたトモキは、「じゃ、行きます」と後部席にいる我々にひと声かけると、セスナを滑走路に乗り入れた。プロペラはぶるぶると激しく回転を増し、進入灯が輝く滑走路をなめらかにすべると、トモキが操縦桿を握るセスナはふわりと大空へ舞い上がった。

トモキ――株式会社タカトモインダストリ代表取締役・高橋智基は、自分の名前が嫌いだった。子どもの頃から、「トモキ」と友だちからも呼ばれたが、嫌いな名前で呼ばれることに抵抗があった。いまでこそ、個性的な名前が子どもにつけられる世の中だが（実際、トモキも自分の息子を真握（マーク）と名づけている）、当時はまだヘンに小洒落（こじゃれ）た名前のような気がしていやだった。

小学校からの帰りには、父親の経営する会社のまえを通らなければならない。そんなときには、「トモキ!」と職人さんから声がかかった。仕事を手伝ってゆけというのだ。

「仕事ができないやつに、宿題ができるはずがないってね、もうむちゃくちゃですよ」と、トモキは当時を思い出して言う。

トモキの実家は祖父の代からの工業一家である。祖父・増雄さんは飛行機の計器をつくる会社を経営していたが太平洋戦争時の空襲で焼失。その後、父・弘さんがはじめた会社は偶然にもやはり航空機の内装部品を製造する会社だった。

仕事に対する事前準備って必要ですよね。でも計画したことを訂正しなければならないこともある

弘さんが経営する高橋精機製作所には、当時10人ほどの職人さんが勤めていた。その職人さんらに、トモキは荒っぽく可愛がられて育った。社員旅行でスキーに行ったときなど、トモキは職人さんに山のてっぺんまで連れてゆかれ、それでも泣きながら滑降してきた。

弘さんはスキーが好きで、トモキを連れてカナダやフランスにも行った。そんな環境のなか、運動神経のいいトモキは、あらゆるスポーツに慣れ親しんでいった。

もうひとつ、幼い頃から彼の心を捉えたものがある。それが飛行機だった。納品で出かけた父についてたびたび行った調布飛行場で見た飛行機は、トモキに大空への夢を抱かせた。

次男坊の気持ち

父の会社は兄の直人さんが継ぐことになるだろう。自分は、いったいなにをして生きてゆくべきなのか？　トモキには次男としての迷いやコンプレックスが常につきまとった。直人さんがアメリカに留学したこともうらやましかった。自分も留学を強く希望したが、その頃、会社の経営状態が思わしくなかったのか、望みはかなえられなかった。

高校は私立の普通科に入学したが、サーフィンばかりしていて、あまり学校には通わなかった。卒業後は、「とりあえず勤めておくかといった、いいかげんな気持ち」で弘さんの会社に入社。ほとんどバイト感覚だった。だが、そこは子ども時代から仕込まれた仕事だ。うまくこなすことができた。

いつしかトモキも20歳を過ぎていた。だが、直人さんが留学したアメリカへの強い憧憬は依然としてトモキを捉えて放さなかった。その気持ちと、幼い頃からの大空への想いがひとつになって時に大きく燃え上がった。

「アメリカに行ってパイロットのライセンスがとりたい！」ある日、弘さんにそう言った。「いまのこの仕事にもきっと役に立つことだから」などなど、とにかくあらゆる言葉を並べ立て、やっとのことで許しを得た。

パイロット免許取得に向けて、まず座学がはじまった。航空力学や気象学を身につける。昼間は働き、夜は勉強。週末には専門学校に通った。そこにはピーター・ターナーというイギリス人の講師がいて、夜にはいっしょに酒を飲み、生きた英語を学んだ。ちなみに親日家のターナー氏は、日本女性を妻に娶り、現在はスカイマークエアラインの機長をつとめている。

猛勉強は10か月に及んだ。「一生のうちあんなに勉強したことはない」とトモキは笑う。

そして、21歳のトモキは憧れのアメリカへと旅立った。

帰還

カリフォルニア州ポモナでの訓練は4か月めに入り、いよいよライセンス取得に向けて最後の難関を迎えようとしていた。

教官が同乗しないソロフライトでクロスカントリーを行う。自分で飛行計画を立て、ブラケットエアポートを発ち、距離にして東京～広島間くらいを飛んで、途中最低3か所の空港に着陸しランディング証明をもらって戻ってくるのだ。

計画を立ててから曇りや雨の日がつづいた。その日も朝から曇っていた。「行くのか行かないのかは自分で決めろ」と教官からは言われている。トモキは迷ったが、空に晴れ間が広がり、飛ぶ決意をした。午前11時――いまから考えると出発には遅い時刻だった。

無事3か所めのランディング証明をもらった。そこまでは順調なフライトだった。遅い昼飯を食べ、給油し、あとは飛んできたルートを帰るだけだった。ところが途中で天候が怪しくなってきた。雲がかかり真っ白でなにも見えない。有視界飛行が不可能になっていた。そうやって真っ白な世界を飛んでいると、上下左右の感覚がなくなってくる。空間識失調というやつだ。こうなったら計器だけを頼りに飛んで、近くにある飛行場に緊急着陸するしかなかった。

トモキはパニックに陥りそうな自分を必至で立て直しながら狭いコックピットで地図を広げた。コンパスで位置を測り、地図に線を引く。

「ここだ！」

近くに空港を見つけた。しかし、間違えれば大きな事故につながる。

トモキは旋回しながら逡巡した。数分間がひどく長い時間に感じられた。

そのとき、雲間にうっすらと飛行場の明かりが見えた。

トモキはその灯を目指して着陸した。「生きていてよかった」と思った。

さっそく教官に連絡を入れたところ、こちらは雲がないから帰ってこいと指示された。夕方5時を過ぎている。すでに暗くなりはじめていた。トモキはこのまま飛ばずに飛行機のなかで一夜を明かそうかと考えていたくらいだったのだ。

指示されたからには戻らざるを得なかった。ぐずぐす言い訳していてはライセンスは取れない。トモキはふたたび飛び立った。雲のなかに入ると、尾翼で赤く光っていたビーコンがたちまち見えなくなる。たまらなく不安になった。

しばらく飛ぶとたしかに空は晴れ渡った。満天の星空が広がった。訓練生のソロのナイトフライトは禁止されている。成り行きだが、トモキは夜間にひとりで飛ぶことになった。

4千メートルの山を越える。上昇率がぎりぎりで、危険を知らせるストールホーンがけたたましく鳴りつづけていた。眼下には、手が届くくらいの近さで、山上の湖が月明かりをぬらりとはね返している。

やがて山が開け、まばらな街の明かりが見えてきた。だが、なにしろ田舎の空港である、すでに消灯してしまって、空からではその位置が確認できなかった。トモキは管制塔にコンタクトした。

「エアポートはどこだ？」

「おまえのすぐ横だ」

「やれやれ」

トモキはため息をつき、空港にすべり降りた。

パイロット・イン・コマンド

ライセンスを取得したトモキは帰国し、ふたたび父の会社での日常に戻った。だが、仕事に対する意識がかわっていた。長く心に降り積もっていた未練や夢がない交ぜになった感情が払拭できたからだろう。次男坊であることの迷い、アメリカに留学できなかったこと……そうしたことに彼は、ポモナの空で折り合いをつけてきた。かわりに仕事に対して情熱的になった。

最新機械が導入され、転換期を迎えていた職場環境にも適合しやすかった。製造業の現場に吹いている新しい時代の風がトモキの肌に合っていた。

いつしか彼のなかにまっさらな夢が芽生えていた。

1997年、トモキは30歳で独立。東京・板橋の住宅地にあるマンションの1階でたったひとりで開業した。タカトモインダストリ――あんなに嫌っていた自分の名前をもじって社名にした。もはや名前に対するわだかまりなどなにもなかった。

狭い路地に面した作業場にトラックに積んだ機械を搬入しようとすると、近所から苦情が集まった。

「もっと周囲に気を配るべきですよね。要するに、まだなんにもわかっていなかったんですよ」とトモキは当時を振り返る。

それでも開業してすぐは、こんなに儲かるのかと思うほど順調だった。もちろん、そんな状態でいつまでもいられるはずがなかった。よい時もあれば悪いときもあった。迷いながらの会社経営がつづいた。そう、それはあのポモナの空で、なにも見えない雲のなかを計器だけを頼りに飛びつづけていたのに似ていた。

「仕事に対する事前準備って必要ですよね。でも計画したことを訂正しなければならないこともある。その時の判断も大切ですね。危機に直面すると、あの地図やなにかでぐちゃぐちゃになった狭い飛行機のなかで落ち着け、落ち着けって自分に言い聞かせていた時のことを思い出します」

2001年には社を現在の埼玉・戸田に移転。従業員も10名を抱えるまでになっていた。

トモキは、高橋精機製作所からの発注だけを受けているのでは真の独立とはいえないと考え、メーカーから直に仕事を請けることを目指してがむしゃらな営業を展開した。電話をかけ、試供品を送り、足を運んで自社をアピールした。いま、その成果があらわれつつある。

「PICという言葉があります。パイロット・イン・コマンド――機長が指令を出す、ということですね。飛んでいる時、管制官との通信は他者とのつながりを感じます。しかし最終決断は自分が決めなければならない。ファイナルの指令を出すのは機長なんですよ。会社もおなじだと思います」

パイロット、トモキの飛行はつづく。見果てぬ夢を追って。

（取材・文＝上野　歩）

（写真／今 祥雄）

Company Profile

株式会社 タカトモインダストリ
所在地：埼玉県戸田市氷川町３丁目 11 番 25 号
TEL：048-447-7202　FAX：048-447-7203
担当者：代表取締役　高橋智基

事業内容：航空機部品加工、自動車部品加工、アルミ・樹脂、3次元曲面加工、スポーツ用品試作加工、五軸加工
エミダス会社・工場詳細情報：
http://www.nc-net.or.jp/emidas/gaiyou.php?72027
※「エミダス工場検索」のキーワード検索「タカトモインダストリ」で検索できます。
本誌付録の「ザ・日本製造業パワーアップCD－ROM」にて、同社の工場技術動画をご紹介しております！

ザ・日本製造業 パワーアップCD-ROM EMIDAS